

別紙様式

平成29年度 宇部市立琴芝小学校 学校評価書 校長(藤川 信利)

1 学校教育目標

教育目標

挑戦し、未来を拓く「琴芝っ子」の育成

中・長期目標

- コミュニティ・スクールを基盤とする地域とともにある学校づくりの推進
- 一人ひとりの豊かな心を育む教育の推進
- 一人ひとりの子どもの学力を保证する教育の推進
- 小中連携、小小連携を踏まえ、子ども一人ひとりのよさや可能性を伸ばす積極的な生徒指導
一層信頼され期待される学校 指標:P-TRUST2015分析 適応34.2%→35% (市街地標準35)

2 現状分析(前年度の評価と課題を踏まえて)

①児童

平成28年度は、学校全体として落ち着きを増し、具体的な行動目標であるチャレンジ目標の実現に向けて取り組むことができた。安心づくりアンケートでも成果が現れてきている。生活面では家庭や地域と連携して小中合同のノーメディアデーを設定し取り組んできたが、元気創造アンケートを見ても、約束を守れないという児童が多い。この点は引き続き課題として取組を強化したい。また、生徒指導面で重点的配慮を要する児童があり、全校体制で支援しているところである。

学力については、R-PDCAを4サイクルでマネジメントし、6か年の経年比較により、学習状況を把握し、学年に応じた課題に取り組み、成果を上げている。県平均を下回り課題の見られた学年もあるが、各設問の分析を行い、具体的な方策を定め、引き続き取り組んでいる。5年生においては確認問題の結果が極端に低くなっている。国語科では、問題文を最後まで読み取らずに答える、算数科では計算間違いによる誤答が目立った。現在、具体的な対策を講じて取組を進めている。

全国学力・学習状況調査結果は、半年前の確認問題で得た課題に向けた地道な取組の成果が現れてきている。しかし、全体としての平均正答率が全国平均前後である。

児童の学級における生活満足度については、児童が感じている学級における承認度と受容度とから、個々の児童が学級生活にどの程度満足しているのかを客観的に測定すべく、平成23年度から学級安心バロメーターチェックを実施している。学級満足群の児童が平成23年度は53%であったものが、平成28年度2学期には過去最高の83%へ増加し、学級生活不満足群の児童が減少し、毎年着実に改善され、学級内では安定して生活が送れていることが伺える。

②保護者

愛媛大学と共同でP-TRUST分析により保護者の学校に対する意識アンケートを実施している。その結果、本年度は、セグメントの散らばりがさらに少なくなり、学校運営に協力的で信頼度が高いセグメント『適応』が34.2%まで、回復してきている。これは、各学年で落ち着いた学校生活が展開されている成果であり、コミュニティ・スクール推進部会を中心にPTAとの連携を進めた成果だと考えられる。

詳細を見ていくと、学校改善主要3項目では、「落ち着いたよい学校だと思ふ」84%、「先生の指導力は高いと思ふ」77.1%、「着実に改善が進んでいる」71.3%といずれも前年度より肯定的な意見が増え、全国平均に近づきつつある。

③地域

琴芝地区はコミュニティ推進協議会を中心に、しっかりとした組織を有している。教育経験豊富な人材が多く、地域の教育力が高く、学校教育に大変協力的である。地域安全づくり協議会をはじめ各種関係団体が「地域の子どもは地域で育てる」を目標とし、子どもたちの健全育成に向けて積極的に手堅い活動を行っている。さらには、「放課後子ども教室」や「夏休みわくわく教室」など、家庭教育を、地域が側面から支援する体制がしっかりと機能している。

地域とともにある学校づくりでは、地域コミュニティと連携したコミュニティ・スクール推進部会を設置し、学校運営に参画していただいている。今後も地域の教育力を生かし、地域とともにある学校づくりを推進していきたい。

3 本年度重点を置いてめざす成果・特色、取り組むべき課題

①コミュニティ・スクール

○ 学校、家庭、地域が相互の連携意識を高める体制を定着させ、『琴芝っ子育成プラン』に沿った実践を通して、相互にルールを大切にする児童の育成を図る。

②学習指導

[学力向上]

○ 『琴芝小学校学力向上プラン』に沿った実践を通して、子どもたち一人ひとりに「確かな学力」をはぐくむ。

[授業改善]

○ 『琴芝小学校授業改善プラン』に沿った実践を通して、4つの視点(①活動的な学び ②共同的な学び ③探究し表現する学び

④触発し交流し共有する授業)に向けた授業改善を図るとともに、日々の授業改善の推進を図る。

③生徒指導

○ 「琴芝小学校安心づくりプラン」に沿った実践を通して、互に関わり合いながら安心して学習や生活ができる学級・学校をつくる。

④児童の元気創造

○ 「琴芝小学校元気創造プラン」に沿った実践を通して元気な子どもを育成する。

⑤特別支援教育

○ 支援を必要とする児童への合理的配慮の充実を図り、児童・保護者・担任が安心できる環境づくりを図る。

⑥事務の共同実施

○ 「宇部市立小中学校徴収金等取扱方針」に基づく適正かつ効率的な校内事務処理体制を整備する。

○ 「宇部市立小中学校文書取扱要綱」に基づく校内文書の適正な管理を推奨する。

⑦業務改善

ゆとりある学校づくりのための業務改善を推進する。

○ 学校の組織等による改善 ・教科担任制等による負担軽減と効率的な会議の運営

○ 日常的な業務による改善 ・業務時間管理による時間外勤務の縮減

○ 勤務状況における改善 ・同学年等チームによる指導体制確立により年休取得日数の増加

4 自己評価					5 学校関係者評価		
評価領域	重点目標	具体的方策(教育活動)	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価
学習指導	【学力向上】 ○「活用力」「表現力」の伸長による基礎学力の定着 ○基礎的学習内容の定着 ○家庭学習習慣の確立 ○読書習慣の形成	○やまぐち学習支援プログラムの活用 ・学年別カリキュラムへの位置付け ・週2回朝学、授業、全校体制による土日宿題の取組 ・提案型少人数加配教員による授業での活用提案・実施 ・保護者・地域と連携したサマースクールの実施 ○考えを書く指導・ノート指導の充実 ・指導マニュアルの改訂 ・ノート展覧会の実施 ・少人数指導、TT指導の活用 ○「ことしば学習の約束」の重点化 ・全校体制での取組と定着度の把握 ○「家庭学習の手引き」改訂と実施 ・保護者・地域との連携による家庭学習(自主学習)の強化 ○「読書通帳」、読み聞かせの継続 ○夏休みの図書館開放	○「学習の約束」達成状況の把握 ・強化月間調査95%以上の達成 ○全国学力・学習状況調査 ○学力定着状況確認問題(年2回) ○やまぐち学習支援プログラム学期末問題(年3回) ・一県を100とした場合、それよりも10ポイントup ○親子で家庭学習への取組 ・家庭70%以上 ○図書館貸し出し冊数 ・年間1人20冊以上	3	○「学習の約束」の達成状況は95%となり、授業に取り組むための道具の準備にとどまらず、心構えも醸成されている。どの学級でも落ち着いた雰囲気の中で学習が進められており、今後も取組を維持していくことが大切である。 ○全国学力・学習状況調査では、県平均を100として、107～130の高い水準にあり、確認問題、学期末問題についても県平均と同程度、または上回る状況にある。平成28年度に課題として挙げられた国語についても改善傾向にある。基礎的・基本的な内容の定着を図ろうとする教職員の意識が高まっており、やまぐち学習支援プログラムの活用についても、肯定的な回答が74%と大きく向上している。 ○親子での家庭学習への取組については前期66%、後期64%と前年度に比べ若干の低下傾向が見られる。共働き家庭が多いことから、土日の家庭学習への取組ませ方について、新たな提案等、見直しが求められる。 ○年間の1人あたりの図書貸し出し差数が25.9冊となり、目標を大きく上回った。	A: 4人(優れている) B: 3人(よい) C: 1人(おおむねよい) D: 0人(要改善) ○授業に取り組む姿勢・心構えも醸成されているので、家庭学習への取組が向上されるよう期待する。 ○土日プリントの裏に答えが載っているの、意味がないかと。裏を見てしまう子が多いようだ。 ○どの学年も学習規律が大切にされ、子どもたちが落ち着いて授業を受けている。その結果として年2回の調査結果に結びついている。 ●話し合う内容を明確にし、協同的に活動できるよう、ペアやグループ学習を積極的に推進してほしい。 ●家庭での教育指導面を充実させる手立てを土日用のプリントだけでなく週1回ウィークデーにプリントを配付(学習習慣を身に付けさせる手立て)。	3
	【授業改善】 ○「学び合い(協同的な学び)」の基となる理念とビジョンの共有 ○実践的研究と省察を通しての授業改善の推進 ○対話による豊かな学びの創造	○本校作成資料「学び合う教室づくり琴芝」を具現化した授業づくり ○各学年部を基盤とした授業研究(全体、ユニット)と反省的実践 ・児童の実態に即したテーマ ・授業改善の四視点」に対する手立ての設定 ・研究協議における授業の成果と課題の発掘 ○聴き合う関わりづくり 「学び合い(協同的な学び)」の授業デザイン 教師の働きかけ(聴く・つなぐ・もどす・ケアする技)の追究	○児童による「授業満足度」評価 ○授業者による授業の考察 ○参観者による授業評価 ○児童の学びの実際からの省察 ・学習ノート・ワークシート等 ・授業記録ビデオ・写真 ○研究協議会における授業の省察 ○授業アンケート調査(前・後期) ・教師による授業づくりチェック ・児童による学習チェック ○地域の方による授業参観と評価	3	○年3回の全体研究授業、年3回のユニット型研究授業、特別支援学級研究授業により全ての教師が授業提案を行う研修を通して、活発な授業改善が進められており、外部指導者からも高い評価を得ることができた。 ○研究授業直後に実施する、授業満足度調査によって、一人ひとりの学習状況を視覚化することで、細やかな見取りが行われるとともに、授業の中での児童の姿をもとにした協議が進められている。 ○教職員アンケートの「考えの交流」「課題の工夫」「全ての児童の参加」「困り感の表明」の各項目で教師の意識が大きく向上している。 ○保護者、地域に対して、参観日や授業研究会以外の日にも、自由参観を呼びかけたことで、スポーツ少年団の指導者など、これまで授業を参観したことなかった方の来校も見られた。協議の場にもより多くの外部の方が参加できるよう、研究会のもち方の工夫等、気軽に授業を参観することのできる環境づくりを一層進めていく必要がある。	A: 1人(優れている) B: 5人(よい) C: 2人(おおむねよい) D: 0人(要改善) ○授業参観では、子どもたちがグループで考え、しっかりと発表することができていると思った。 ○外部指導者から刺激を受けていること以上に、校内で互いの授業について率直に意見交換がなされていることが授業改善が進んでいる要因になっている。教職員に学ぶ姿勢があることが素晴らしい。 ●図書室やコンピュータ室を有効に活用してほしい。 ●ペアやグループで学習をするのが苦手な児童を好きにさせる、楽しく学習できるよう工夫してほしい。 ●児童同士が教え合う授業スタイルと子どもだけである程度までの課題解決をさせていってほしい。	3
生徒指導	○「笑顔の学校宣言」の実現 ○全校体制による好ましいルール感覚の醸成 ○基本的生活習慣の徹底	○「琴芝小学校笑顔の学校宣言」の徹底 ○気持ちのよい挨拶や感謝の気持ちを伝える指導 ○校内の挨拶運動と地域との連携による挨拶の励行 ○共感的児童理解と望ましい言葉づかいの指導 ○「学校生活のやくそく」「校外生活のやくそく」の継続的確認と繰り返し指導 ○身の回りの整理整頓を徹底 ○養護教諭との連携 ・保健室情報の共有 ○履き物の整頓や名札の着用等を通して心を揃える指導 ○各委員会活動との連携	○学級安心バロメーターチェック(学期1回) ・満足群 85%以上、不満足群5%以下をめざす ○進んであいさつをする ・児童95%以上、地域70%以上、家庭90%以上 ○掃除を黙って一生懸命している ・児童95%以上	2	○学級満足度は1学期末調査で、満足群77%、不満足群6%という結果であった。 ○あいさつの状況については、児童95%、保護者75%、地域55%という結果であった。地域からの気付きとして改善してきているという声も聞かれることがあり、毎日の生活習慣として定着させていく必要がある。 ○掃除を一生懸命していると回答した児童は97%となっているが、教職員の実感とのずれが大きい。望ましい掃除の仕方について、全校で規準を明確にし、系統的・継続的に指導し、児童の意識の変容を図っていく必要がある。	A: 3人(優れている) B: 4人(よい) C: 1人(おおむねよい) D: 0人(要改善) ○最近の子は理由があって「あえて」やっているのではなく、そもそも「悪い」という認識がないと思われる。 ○挨拶は生活習慣として定着させてほしい。 ○子どもたちは進んで挨拶をしている。 ○子どもたちは礼儀正しく落ち着いて学校生活を送っている。教室内の挨拶は元気よくできている。廊下や学校外でも自然な挨拶ができるよう児童会の取組に入れてみてはどうでしょう。 ●アンケートから、保護者が自分子どもに目が向いていないと感じる。親子の対話を多くさせる学校からのアプローチはないだろうか。	3

評価領域	重点目標	具体的方策(教育活動)	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価
地域連携	○学校、家庭、地域の三者が協働で取り組む「琴芝っ子育成プラン」に沿った実践を通して、人とかわり、愛される琴芝っ子を育成する。	○CS推進部会(絆・環境・心と体、学び)の具体的な活動計画の実行によるコミスク体制の定着 ○宇部市小中学校区拡大大学校運営協議会を開催し、中学校区としての活動を模索する。	○コミュニティ・スクールの認知度を、保護者70%、地域50%をめざす。 ○学校支援活動、地域貢献活動を年間10回以上開催する。 ○学校は地域に貢献している80%以上 地域住民が、学校行事に積極的に参加している70%以上	2	○コミュニティ・スクールの認知度は、保護者71%、地域54%、児童36%となり、目標値を達成した。幟旗の作成により明るいイメージが地域に広がりつつあり今後も一層の地域との連携を図っていく必要がある。 ○学校支援・地域貢献活動の開催も安定してきており、学校の地域貢献については、保護者87%、地域82%が肯定的な回答を寄せている。今後も地域のニーズを学校の教育活動に取り組む一層の工夫を図り、地域連携の取組を充実させていく。 ○地域住民の学校行事への積極的な参加についての肯定的な回答は、保護者72%、地域38%となっており、「学校を訪れることに抵抗を感じる」地域34%と併せ、学校の敷居を下げる一層の工夫を図っていく必要がある。学校運営協議会・推進部会の構成について、教職員の参画を一層進める観点からの見直しも進めていく必要がある。	A:2人(優れている) B:4人(よい) C:2人(おおむねよい) D:0人(要改善) ○様々な生活体験の機会を確保し、地域社会での交流を深めるとよい。 ○地域の方がもう少し学校行事に気軽に参加できるようになるとよい。 ○コミュニティ・スクールについて、どのようなものか知らない人が多いと思う。校長先生のブログを通して地域に向けても学校の様子がわかりやすくなった。 ○地区の行事等で小学生の姿を目にすることでしか状況を把握できていませんが、地域とのつながりを大切にされていると思う。 ●高学年をグループ化(ボランティア部でも)して、地域行事の手伝いをするなど、積極的に仕掛けていく手立てを。 ●CSに対する認知度が低いのが気になる。	3
特別支援教育	○支援を必要とする児童への合理的配慮の充実を図り、児童、保護者、担任が安心できる場づくりを図る ・インクルーシブ教育の理解推進 ・校内委員会の内容の充実と校内体制の強化 ・家庭・地域・専門家との効果的な連携	○担任との連携を密にして、問題が顕在化・潜在化している児童の早期発見と実態把握 ○支援方法についての研修や情報提供 ○情報の共有や連携により、役割分担を明確にした効果的な支援の実施	○特別支援関連研修を年3回以上実施する。	2	○地域コーディネーターを招聘しての研修に加え、個別の支援に関する指導助言の機会や宇部総合支援学校での担当者研修等、前年度以上の研修を実施した。 ○校内委員会を通して、各学年で困り感をもった児童の把握と情報共有、具体的な支援について協議し、同一歩調での指導に当たることができており、今後は指導計画等、書面に残して共有することにより、一層の共通理解と、個を大切にした教育活動の充実を図っていく必要がある。 ○障害者差別解消法に則り、合理的配慮の提供について、従前の支援の在り方の共有や見直しを図り、新しい時代の特別支援教育の充実を図っていく。	A:2人(優れている) B:2人(よい) C:2人(おおむねよい) D:0人(要改善) ○普通学級では不適応を起こす中間領域の子どもや多動性障害 ○配慮の必要な児童に丁寧に支援されている。職員室でよく情報交換をされている。	3
元氣創造	【メディア】 ○正しいメディアとの接し方 【食育】 ○「食べカ」の伸長 【体育】 ○多様な運動への挑戦 【読書】 ○本に親しむ子どもの育成	【メディア】 ○正しいメディアとの接し方 ・Noメディアデー 【食育】 ○「食べカ」の伸長 ・朝食コンテスト ・もりもり朝ごはん週間 【体育】 ○「琴芝アスレチック」の実施 ・強化週間の設定(年2回体育委員会活動) 【読書】 ○図書館活用の促進 ・全校一斉、朝の読書タイム ・読書の時間を活用した授業での活用の促進 ・図書館支援員・読み聞かせボランティアとの連携	○Noメディア調査(年2回)実施者100%を維持。 ○朝食調査、残量調査(年2回) 朝食を毎朝摂取している児童100%をめざす。 ○体力調査柔軟性の項目を県平均よりup ○図書館貸し出し冊数 →年間1人20冊以上	2	○メディアとの接し方については、学校保健安全委員会や外部講師を招聘しての授業等、年間を通して重点的に指導を行った。児童アンケート「テレビを見たり、ゲームをしたりするときの約束は守れている。」に対する肯定的な回答が、前期89%、後期88%となり、70%を割っていた昨年度から大きく向上した。 ○朝食の摂取状況は、児童の回答が92%、保護者の回答が95%と昨年度と同程度の結果となっており、100%をめざして保護者への啓発を続けていく。 ○給食残量調査では、5月、1月ともほぼ完食となり、良好な状況にある。 ○体力調査柔軟性の向上については、長座体前屈が男子26.6cm、女子31.1cmと昨年度の記録を下回った。外遊びの励行だけでなく、積極的な運動習慣づくりが急務である。 ○図書館の貸出冊数は、2月末で平均25.9冊を達成した。今後は、よく読書する児童と、あまりしない児童の差を縮めていく必要がある。	A:0人(優れている) B:3人(よい) C:4人(おおむねよい) D:1人(要改善) ○体力向上プログラムの取組を強化し、体の育成に重点を。 ○体育館が完成したので、今後跳び箱など今までできなかった運動ができると思う。読み聞かせボランティアの減少。もう少しボランティアが増えるといい。 ○好き嫌いなく食べれることはとても良い。 ○メディアコントロール、生活習慣については中学校も同じ状況です。小中で実質的な連携ができると思う。 ●子どもの挨拶が少なくなってきたように感じる。 ●外遊びの習慣化を(ゲーム等、興味をもたせて子ども同士で遊ばせる。子どもは勝手にルールをつくり集団遊びをするのでは。	2
事務の共同実施	○「宇部市立小・中学校徴収金等取扱方針」に基づく適正かつ効率的な校内事務処理体制を整備する。 ○「宇部市立小中学校文書取扱要綱」に基づく校内文書の適正な管理を推進する。	○校納金については、年度初めに具体的な方策を示し、その都度の会計担当者支援と連携の強化 ○口座振替による納入の一層の推進 ○督促・納入指導等による校内連携体制整備による未納者対応の促進 ○文書主任を中心とした適正文書取扱の推進	○校納金口座振替者割合100%をめざす。 ○未納者数0を継続する。	2	○校納金口座振替者の割合については、前年度と同じ98%であり、安全な校納金管理を行うことができています。 ○校納金の未納については、本年度も0となる見込みであり、今後もこの状態を維持していきます。 ○共同実施を通して、市内の事務処理の適正化・効率化・統一化を進め、学校間の格差を解消した事務の業務の在り方を一層確立していきます。 ○文書の集中管理については、各担当者による文書の管理方法との意識のずれが見られ、今後事務担当者による文書管理との整合性を図ることで、業務の改善に努めていく。	A:0人(優れている) B:4人(よい) C:1人(おおむねよい) D:0人(要改善) ○教諭の調査事務など多忙を極めている。小学校では一人事務が多いが他校との連携も必要になる。 ○宇部市の共通実施内容である事務の適正化・効率化・統一化に向けた取組が進みつつある。事務部門の小中連携が今後さらにできるとよい。	3

評価領域	重点目標	具体的方策(教育活動)	評価基準	達成度	重点目標の達成状況の診断・分析	学校関係者からの意見・要望等	評価
業務改善	学校の組織等 教科担任制等による負担軽減と効率的な会議の運営	各種会議の開始時刻・終了時刻の厳守 各種校内委員会開催曜日の固定化	○職員会の運営や組織的な取組に対する職員アンケート肯定的評価90%以上をめざす。	3	○各委員会の開催回数の精選、職員会議での提案内容の焦点化、会議時間原則1時間等の取組を通して、教職員アンケート「職員会議・その他諸会議は、効率的な運営がなされている」の肯定的な回答は、後期94%となった。	A:1人(優れている) B:5人(よい) C:1人(おおむねよい) D:0人(要改善) ○学校経営ビジョンの明確化と業務改善に向けた組織的、機動的な新体制づくりが必要と思われる。 ○金曜日が水曜時程になったことにより、先生方は時間ができたのでは。 ○金曜日の時程を思い切って変更されたことにより、時間外業務時間が軽減という結果に結びつき、素晴らしい。 ●校務の情報化により効率的な業務が行われると感じていましたが、アンケートでは昨年よりも下回っているのが疑問を感じた。	3
	日常的な業務 業務時間管理による時間外勤務の縮減	○各主任を中心とした組織で取り組む体制づくりの推進による協働体制の強化・充実	○業務時間外業務時間調査、40時間/人 以下をめざす。	3	○月2回個人別の時間外業務の状況を視覚化して提示し、効率的な業務の進め方について話し合うこと、金曜日の時程を変更して、放課後の時間を80分確保すること等を通して、4月から1月までで、1人あたりの平均時間外業務時間が36.4時間となった。		
	勤務状況 年休取得日数の増加	○勤務割り振りを変更する場合の周知徹底及び勤務実態の把握と適切な管理 ○毎月のノー残業デーの設定による、効率的な業務の進め方への意識付け	○年休取得日数、15日/人以上をめざす。 ○年休を取りやすいと感じる教職員の割合が70%を超えることをめざす。	3	○1月から12月の年休取得日数の平均は、11.9日となり、平成28年より減少している。 ○教職員アンケート「必要なときには、年休が取りやすく、働きやすい環境である」の肯定的な回答は、後期95%となった。		

6	学校評価総括(取組の成果と課題)
本年度、学力向上や授業改善をはじめ、年間の様々な取組を低中高別のブロックで進める機会を増やし、職員室の座席配置もブロックでのコミュニケーションを考慮したものに変更した。昨年度まで同学年2～3名で行われていたやりとりが、4～5名での営みとなったことで、職員同士の活発なコミュニケーションが日常的に見られるようになった。また、常に隣学年の取組に触れることで、学年間のつながりや学校組織全体を見据えた動きも増え、風通しのよい組織づくりを進めることができたと考ええる。各種アンケート調査における教職員の意識の高まりも、このような職場の雰囲気によるものと感じている。 「学力向上プラン」「授業改善プラン」「学校安心づくりプラン」「元気創造プラン」に基づいた年2回のPDCAサイクルの機能が安定してきている反面、形骸化も危惧されるところである。年度当初に決めた具体的な取組の検証方法についても常に見直ししながら、PDCAサイクルと実際の教育活動が一体となるよう留意していく必要がある。 学校生活や家庭・地域生活についての児童の自己認識と周りの大人との認識のズレについては数年来の課題であり、効果的な指導方法を見出せていない状況にある。具体的なモデルの提示や学校組織全体での取組の強化等、ポイントを絞った取組について検討していく必要がある。 コミュニティ・スクールを基盤とする地域とともにある学校づくりの推進については、本年度も全教職員が参加しての推進部会を開催し、教職員一人一人と地域のつながりを深めてきたが、今後も教職員の参画を一層進めていくことが課題である。学校運営協議会への教諭の位置付けや推進部会単独での活動の実現等、実効性のある仕組みづくりが必要と考える。組織の構成については、現在の4部会制度を、中学校区の組織改編に合わせて3部会制度に移行していくことで、本校の取組を中学校区全体の動きとつないでいくことで、やりがいの感じられる「やまぐち型地域連携教育」の一層の実現を図っていきたい。 業務改善については、本年度の目標を上回る、超過勤務時間の大幅な削減を実現した。働く環境の一層の改善と、教職員の人材育成を両立させることで、社会のニーズに応えながらの働き方改革を進めていくことが課題である。	

7	次年度への改善策
(1) 学習指導 ① 親子で取り組む家庭学習の方法について、共働き世帯の実情に応じた提案を行い、家庭でのよりよい学習習慣の形成を図る。 ② 魅力ある課題の蓄積と活用を通して、児童の姿の見取りと教師の働きかけに焦点化して、授業研究を深化させる。 ③ ブロック研修に地域人材等の外部人材の一層の参画を図り、学校に対する多様なニーズを反映した授業づくりを進める。 (2) 生徒指導 ① 挨拶や掃除について、求められる姿を具体的に提示することで、客観的に自己を見つめ改善しようとする児童を育成する。 ② 義務教育9年間の成長を見据えた指導計画をもとに、学校組織全体で取組を進め、より良い自己実現を図る。 (3) 地域連携 ① 学校運営協議会に推進部会のチーフ教諭を位置付け、地域連携に携わる教職員を増やすことで、教職員の参画意識を高めるとともに、推進部会の主体的な取組の充実を図る。 ② 児童・保護者・地域への新たな情報発信の在り方を模索し、コミュニティ・スクールの認知度を本年度以上に高める。 (4) 特別支援教育 通常学級に在籍する支援を要する児童について、指導計画の見直しと支援の具体の共有を通して、一人一人が安心して学校生活を送ることのできる支援体制の充実を図る。 (5) 元気創造 体育科の授業で取り組む体力向上のための運動メニューや、中間時間・昼休みに取り組める遊びのメニュー等、運動習慣づくりのための具体的な実践内容を決め、全校で取り組む。 (6) 事務の共同実施 「宇部市立小中学校文書取扱要綱」と校内の文書管理の整合性を図り、文書の集中管理体制の充実を図る。 (7) 業務改善 ① 児童下校後の業務時間の確保のため、校内組織・会議の再編及び校時程を見直し、業務の効率化を図る。 ② 通知表、要録の作成及びその他業務の電子データ化により、校務作業の効率化を一層推進する。	